



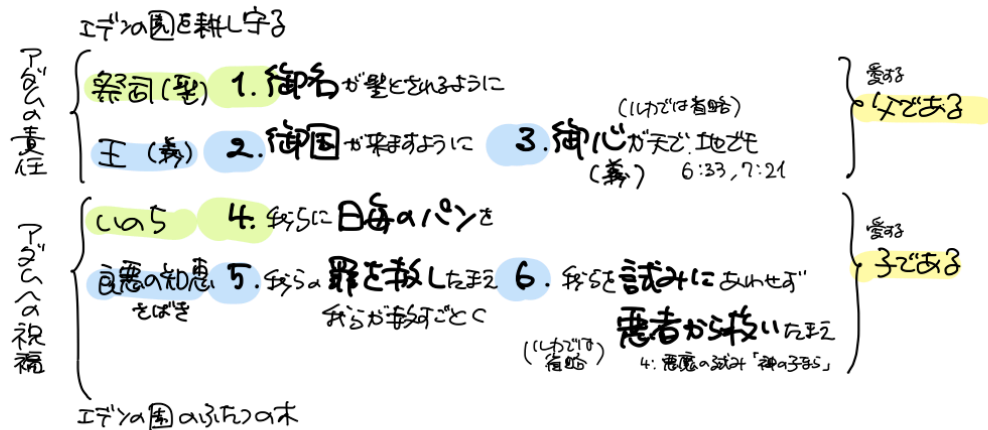
主の祈り #2

主の祈りのかたち

パターン・型・フォーメーション・構造
主の祈りのかたち

マタイ6:9-12, ルカ11:2-4

2017.11.30



- ・マタイ6:14-15 罪を赦し給うことが祈る → マタイ: 天の国民 義民は救われる
- ・ルカ11:5-13 聖霊(パン)が与えられることが祈る → ルカ: 永遠のいのちをもつ聖徒は救われる

「主の祈りのかたち」主の祈りには、かたちがあります。パターン、型、フォーメーション、構造などと言い換えることができます。

主の祈りには課題が6つあります。その6つが何らかの区分で分けられて、ただ6つに並んでいるわけではなくて、並行する構造があるものとして書かれています。その書かれているかたちがありますので、そのかたちで他の箇所を見て、使うことができるものとして教えられているものということです。

マタイ福音書の山上の説教の中に、この主の祈りと言われる部分があるわけです。この中とルカ福音書の中と少し課題が違ってはいますが、ここでは、マタイ福音書で考えます。

(1)御名があがめられますように。(2)御国が来ますように。(3)御心が天で行われているように地でも行われるように。(4)日毎のパンを与えてください。(5)罪を赦してください。私たちは兄弟の罪を赦しました。(6)私たちを試みにあわせずに悪者から救ってください。という6つになっています。

(6)は悪からお救いくださいという訳になっていますけれど、(聖書の)下の別訳を見ると悪い者から救ってくださいと書いてあります。こちらのほうが良いのではないかなと思います。何か漠然とした悪から救ってくださいというよりは、悪者から救ってくださいと言っているところです。ちょうど主の祈りが教えられている山上の説教の前のとこ

ろで、サタン、悪魔の試みにあつて、「神の子ならば…」と言って、悪魔の試みから救われたという箇所も直前にありますから、この悪者という具体的な敵がいるということが、試みにあわせる悪者という意味でも、悪からというよりは、悪者からと言うほうが良く分かります。ですからここが一つです。

前に主の祈りは何ですかという話をした時に、父と子の愛の証しであるという話をしました。天の神は我らの父です。神様は私たちの父です。私たちはあなたの子どもですということを、この祈りの課題が答えられた時にあらわされるものということです。愛する父である愛する子であるという愛の応答の関係になっています。

この3つずつ、日本語で言うと、「御」「御」「御」というものがついているのと、「我ら」「我ら」「我ら」ということでも2つに分かれることがわかりやすいと思いますが、神様がどういうお方なのか、私たちはどうして欲しいのか、というようなことが、2つに分かれるものです。

この2つに分かれているものそれぞれが、また2つに分かれるということなのですけれども、(1)御名が聖とされるようにということと、(4)我らに日毎のパンを与えてくださいと言っていることが似ていることだと。2番目の御国が来ますようにと、(3)御心が行われますようにということと、(5)罪を赦し、(6)試みに会わせないでくださいということが似ていることだというのが水色と緑で違っています。

御名が聖とされるということは、聖い話です。いのちの話をしているのが日毎のパン。いのちの心配をすると言われてはいますが、このいのちの話をしていることは死に汚れていない。聖なるものとされているという意味で、聖なることといのちは並行しています。

御国が来ますように、御心と言っているのですけれども、御国とその義を第一に求めよと言っているその義ですね。義しさ、あわれみです。あわれみの王様の国が来るようにということを頼んでいるわけです。

あわれみの王様は、善と悪を裁いてくださる。罪を赦して悪者から守る、悪者をさばく。これがソロモンが神様に頼んだように、善人と悪人をさばく知恵、これが王様に私たちが求めているものです。正しい裁きをしてくださいということを頼んでいる、その王様の国が来ることを頼んでいますので、こちら側(水色)が王様側。祭司、王、祭司、王。いのち、知恵、いのち、知恵という組み合わせで6つを分けることができるでしょう。

最初の3つは、エデンの園のアダムのことを思い出せばわかるように、エデンの園で、園を守って耕して栄えるようにするというのがアダム責任。全地がアダムのもとに従わされることを話しています。後半、そうすると、神様は知恵を与えてくださって、とこしえのいのちを与えてくださるというアダムへの祝福というほうです。それは、エデンの園の2つの木。善悪の知恵といのちの木というところにあらわされています。ですので、1,2,3,4,5,6の6つの課題は前後2つに分けられるのと同時にそれぞれ、2つずつに分けられるものだと思います。

マタイ福音書の主の祈りともう1箇所ありますルカ福音書というところですね。先ほど間違えました。「主の祈りとは」というビデオのほうで、平地の説教の中で言われていると言っていましたけれど、間違いです。平地の説教ではない箇所ですね。ヨハネが弟子たちに教えたように祈りを教えてくださいと言っている箇所の祈りの中に、マタイに書いてあつてルカに書いていないところがあります。

そうすると、それがもし、ないとかたちがちがうのかということになってしまうのですけれど、そこに書いていなくても、省略されていても、同じかたちですということを見たいと思います。ルカ福音書のほうでは、3番目の御心がというところが書いてありません。それと、6番目の試みに会わせないでください、悪者から救ってくださいというのが書いていないです。「御国が来ますように」で終わっています。「試みに会わせないでください」で終わっています。少し足りない感じなのですが、ルカ福音書で省略されている「御心が天で行われているように地でも」と言っている義の部分ですね。これが、もし、なかったとしても、これは御国というのに含まれている。御国と義はセットだと。あわれみの王様が来るということは、ずっと言われていますので、ここがなくても、2番だけでもこのことを含んでいるということになると思います。

それと、6番の試みに会わせずのところに、悪者から救ってくださいが入っていませんけど、この悪者から救ってくださいが無かったとしても、試みに会わせる者というのがいますので、あえて言わなくても、6番目に悪者から救ってくださいが入っている。試みる者、サタンは試みる者という名前だったりします。それで、6番に含まれていると考えられますので、1,2,4,5,6とかたちになっても、前半後半というものと、緑と青の祭司、王、祭司、王とかたちは変わらないということが言えます。

じゃあ、どうして無いのかということなのですけれど、マタイ福音書のほうは、主の祈りの後に「もし、人の罪をゆるすなら」と罪の赦しが強調されています。ルカ福音書のほうは、この祈りの後に「パンを貸してくれ」という話と「求めよさらば与えられん」で御霊が与えられるという話が続いて一つの段落になっています。マタイ福音書のほうは、罪の赦しが強調されているマタイ福音書と、御霊、いのちのパンを与えられていることが強調されているルカのほうです。

マタイ福音書の全体のテーマは、天の国に入れる人は誰か、義と認められる民は誰なのかということが、マタイ福音書のテーマです。ルカ福音書のほうは、永遠のいのちを与えられる者は誰なのか、その聖徒は誰なのかというのがということが、ルカ福音書の全体のテーマですので、マタイ福音書のほうで罪の赦しが強調され、この義が強調されているというところが、主の祈りのかたちの中で強調されている。ルカ福音書のほうは、永遠のいのちの話なので、特に義について書いていなくても、その強調点は変わらないかなと思います。マタイのほうは良いこと、ルカのほうは聖霊というように、この全体のテーマと、主の祈りの2つの箇所が違っているのですけれども、役割が違って別々の文脈の中に入れられているということに意味がある。

反対にそういう箇所に入れられているので、マタイ福音書のテーマ、ルカ福音書のテーマは何なのかと考える役割として役に立っていることにもなるかと思います。祈りにかたちがありますということですので、このかたちは、他のものを見るめがねになっているということですから、他のものを「主の祈り」を通して見てみるということが、妥当な次の研究になることだと思います。

主の祈りは、どうしてマタイ福音書とルカ福音書だけであって、マルコ福音書やヨハネ福音書にないのだろうかということなのですけれど、その観点で探るためには、4つの福音書というものの役割をマタイやルカの役割のように見ないといけなのですけれど、マルコ福音書はあわれみの王であること。ヨハネ福音書は私たちの大祭司であるということ。マタイとルカは私たちは神様の民ですよ、聖なる民ですよという民側の祝福についてを話しています。マルコとヨハネはキリストは頭ですよ、という頭側の話をしています。ですから、マタイとルカは、私たちが受ける報いについて教える段落が入っているというのが妥当なことです。天の国民になるということ、永遠のいのちをいた

だくということのリストとして、主の祈りが教えられているのがマタイとルカの中だということが、その観点でも妥当なのだと思います。

追加

「国と力と栄えとはとこしえになんじのものなればなり」が、教会初期の礼拝用の祈禱文として、後世、追加されたものだというのを忘れました。1歴代誌29:11のダビデの祈りからのものだと言われています。